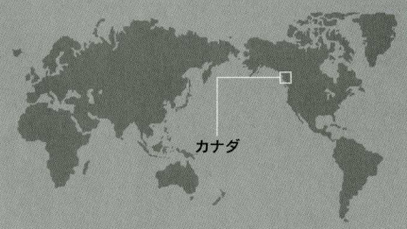
地球を集める

ポトラッチで作って貰ったトーテムポール

大給 近達（おぎゅう ちかさと）
本館名誉教授



昭和五一年九月に、トーテムポールを製作依頼し購入する目的でカナダのバンクーバーに出発した。

わたしはアメリカ展示の担当者になったので、民族の文化を語るうえで誰もが印象に残る標本のひとつとして、巨大なトーテムポールがわが博物館にも欲しいと考えた。

しかしできあがったトーテムポールは屋外に建てるものであり、風雨にさらされ朽ち果てていくものを購入することは不可能であった。そこであらたに作って貰うことにした。カナダの西海岸民族として代表的なハイダ族、ニスガ族、クワキュートル族の三つの民族のトーテムポールを製作して貰い、それを購入することに決めた。

今回の製作にはカナダのバンクーバーにあるブリテッシュ・コロンビア大学でトーテムポールの製作に造詣が深い考古学研究室のお世話になることになった。

ここで紹介を受けたトーテムポールの製作者は、カナダではアーチスト（工芸者）とよばれ、トーテムポールだけではなく彼らの氏族に伝承されている動物の文様やレッドシーダーで作られている家屋のシルクスクリーンまで手がける誇り高き芸術家でもあった。

ハイダ族とニスガ族、クワキュートル族のアーチストたちは名前もカナダの住民のように名乗っているが、実際は民族の伝統的な名前ももっていた。普段はわたしたちと話すときは英語で話すことができる。これはカナダ政府の方針でカナダの先住民にも強制的に学校で学ばせた結果であろう。

このことが今回のトーテムポール製作の契約に思わぬ落とし穴となったことに後から気付くことになってしまった。

手付かずのトーテムポール

三つの民族のアーチストと製作についての契約が終わったのはバンクーバーに到着して四日後であった。製作が完了し、わたしが引きとる時期は今回の出張が終わる直前の一一月の二〇日と決めた。それから運送会社の手続きをして日本に送らなくてはならないからだった。

その日はアーチストも上機嫌でトーテムポールが多数立っているスタンレー公園を皆で案内してくれた。

わたしがクワキュートル族のトーテムポールを見ていたとき、アーチストのロイ・ビッカースから「トーテムポールは鑑賞するものではなく刻まれた彫刻から祖先の物語を読みとるものです」と言われて、はじめてトーテムポールが祖先の系譜を物語る古事記のような役割を担っていることがわかった。ニスガ族は氏族の歴史がポールの下から上に彫られており、ハイダ族やクワキュートル族は歴史が上から下に描かれていることも初めて知った。

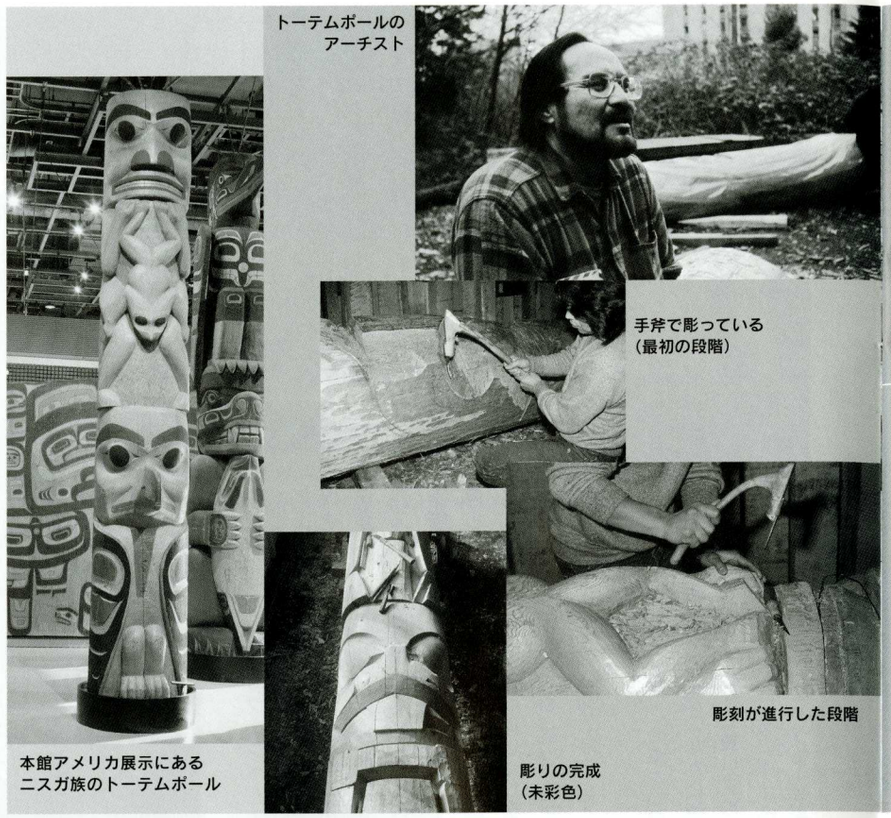
今まで読んだ民族誌には書かれていないことであった。それならばと、トーテムポールができあがるまでのあいだ、カナダの西海岸民族についてフィールドワークをすることにした。

しかし二ヵ月後に調査を終え、ブリテッシュ・コロンビア大学を訪れると、工房には巨大なトーテムポール用の木材が皮付きのまま並べてあるだけで、契約したアーチストは誰も手を付けずに置き去りにしたままであった。これを見た瞬間、帰国までに間に合わないかも知れないという驚きでことばも出ない状態だった。

早速考古学研究室にいって、アーチストが何故仕事をしないのか訊ねてみると、主任教授は笑顔で答えてくれた。

「トーテムポールを製作するアーチストは確かにカナダ人ではあるが、彼らはカナダの文化のなかに生きているのではなく未だに伝統的な西海岸民族のなかに誇りをもちながら生きているのです。貴方が彼らと交わした契約は納期にしても守るつもりはないのです。こんなことは今までに何回もあったのですから、カナダの法律を盾にして交渉しても無駄に終わります」というビックリするような回答が返ってきた。

翌年には民博で一般公開される予定で、多額な購入資金も今年の予算から支出されているので、アーチストの都合に合わせて購入することはできない事情がある。どうするか一晩考えることにした。


本館アメリカ展示にあるニスガ族のトーテムポール
トーテムポールのアーチスト
手斧で彫っている（最初の段階）
彫刻が進行した段階
彫りの完成（未彩色）

そういえば一〇年も前のハイダ族の民族誌を思い出した。彼らは豊富な魚の資源に恵まれた採集狩猟民でありながら、漁業の収穫物を燻製にして保存する技術で富を蓄え、支配者、平民、奴隷の階級をもつ世界でも希な社会を築いていた。

そして蓄えた食物で冠婚葬祭には氏族を招待し、大判振る舞いをしてから引き出物として銅板紋章なども参加者に配る。このポトラッチとよばれる饗宴をおこなうことが民族誌に記されていた。また、招待された者たちは、自分の家族のときには倍返しで返礼をすることとされている。もしこれが実行できないときは氏族から笑いものにされ階級も下の階級にあつかわれるという習慣になっていたのである。

ポトラッチで催促

わたしはバンクーバーに戻って三日後に、ハイダ族、ニスガ族、クワキュートル族のアーチストたちに民博公開のためのポトラッチを有名なレストランでおこなうので招待する旨を書いた書状を送った。

わたしの主催したポトラッチの席上のあいさつで、本日のポトラッチは残り少ない滞在なのでお返しはトーテムポールの製作で結構であるが、もし滞在中にトーテムポールができなかったら、民博の公開の折に、トーテムポールの大きな写真だけを飾り「ただいま、ロイ・ビッカースに注文しているが間に合わなかった」というような掲示を張る考えだと述べた。

アーチストの面々はどこか緊張して顔も青ざめたようであった。

その晩のことであった。大学の考古学研究室の教授から電話が掛かり「貴方はアーチストに対しどんな交渉をしたんですか。深夜から大学の工房でアーチスト三名が寝ずにトーテムポールを彫っているよ」と吉報が入った。

ポトラッチという彼ら民族の伝統的な饗宴をしたことを話すと、教授はさすが人類学者だ、カナダの文化を使わず西海岸民族の文化を使って催促するとは考えもおよばなかったと絶賛してくれた。

一週間後には素晴らしいトーテムポールが工房でできあがっていた。アーチストはポトラッチをされて、もし製作が間に合わなかったら氏族の恥さらしになると思って頑張ったと言ってくれた。

この機会に是非素晴らしい開館を見たいから連れて行ってくれないかと言うので、冗談でポールをくりぬいてなかに入っていたら無料で大阪に行けるよと返事したら、みんな大笑いで手を叩いていた。

このように民族資料の収集は西洋文明では簡単に割り切れない民族の伝統文化を知らないと収集ができないことが起こりがちである。